

Newsletter

2021.3.3

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

—ミックス型授業への挑戦— 総合系科目・コラボレーション科目「演芸の世界」

「演芸の世界」コーディネーター／異文化コミュニケーション学部教授
細井 尚子

本コラボレーション科目では、グローバル化時代に生まれた学生が、日本が近代化によって経験した変容と、グローバル化の到来によって生じた新たな変容について理解することを目的としている。こうした変容を人々の娯楽世界から見ようというもので、その背景には近代化の下、忘れられてきた大衆的な芸態の復活現象がある。コラボレーション科目は3人の講師が協働して行う。この形だからこそ可能な授業をと考え、気楽に楽しめる娯楽空間である寄席に注目した。そこで演じられる多様な芸態をサンプルに授業内容を構成し、「1回3コマ集中開講」という形を予定していたが、今年度は新型コロナウイルス感染予防のため、1回2コマ（全7回）の構成とし、教室でもオンラインでも受講できるミックス型で開講することになった。

最終回を除く授業は4つのブロックで構成している。最初にその芸態の歴史や特徴などの基礎的知識を講義と関連映像で学ぶ。次にその芸態の演者が実際に学生の前で芸を披露し、学生は観客としてその芸態に触れる。演者は自身の芸態や修業時代の話、演じる上での難しさなども学生に伝える。これは、学生が基礎的知識として得た情報や観客として実際に芸態に触れた実感に加え、人によって演じられ、継承される芸態であることを無意識にも感じ取り、情報・知識に血肉を与えることを期待した仕組みである。3つ目のブロックは学生が観客席から舞台に移って演者を経験する時間で、演者の指導の下、実際にその芸態をやってみるワークショップになる。毎回学生が楽しみながら経験する時間だが、今年度はマスク着用などの制限やミックス型ということもあって、最も心配なブロックだった。4つ目のブロックは講師2名と演者のトークセッションで、この段階までに十分に言語化されなかったもの、あるいは伝わり切っていないと思われるものをトークの中で確認したり、三者三様の考え方や意見を示して学生に考えてもらう。あとに続く学生の質問時間では毎回活発に質問が出されるが、中にはこちらが思いもつかなかった視点のものもあり、教員も大きな刺激を与えられている。そして最後に、演者から出される「お題」についてリアクションペーパーの提出を求めている。

最終回の授業は総括と教場レポートである。総括では個々の具体例から大衆的な娯楽における日本の近代化・グローバル化による変容の問題へ帰納し、更に大衆的な娯楽自体はひとつの具体例と位置づけ、そこから近代化以降の日本について考える。教場レポートは学生が授業で得たものを土台として考えることに比重を置くため、関連の研究成果や他者の言葉だけに頼れないテーマを設定する。毎回のリアクションペーパーと合わせて読むと、学生の学習過程・成果を如実に把握でき、本科目の授業目標の達成度を測る上で適した形式と考えている。

心配していたワークショップについては、5回目の「動物ものまね」がマスクを外せないために代表の学生のみ行う形になったが、その他は全員ある程度体験できたと思う。一方、オンライン受講と教室受講の双方をミックス型授業で経験した学生によると、やはりワークショップは教室でやるほうがよいとの感想があり、検討課題として講師陣の間で共有していた。そんな矢先、2021年の年明け早々に再び緊急事態宣言が発出され、6回目と最終回をオンラインのみで開講することになった。6回目の漫才のワークショップはZoomのブレイクアウトセッションを用いて2人ずつ組み、2～3往復の会話による漫才を作ってもらった。ペアを変え、要求も変えて2回行ったが、なかなかの傑作ぞろいで爆笑を誘った。もし教室での対面式であったなら、マスク着用のほか、ペアになる2人の間に一定の空間を確保し、相談する声の大きさも制限せねばならなかったと思うと、オンラインだからこそ十分に実施できたワークショップだったといえるだろう。次年度以降、万一に備えて事前に準備をせねばならないが、この経験により「オンラインでもできること」ではなく、「オンラインだからできること」に構想の起点を転換することができた。これまでになかった状況の中で困難の連続であったが、授業方法と成果に関して、多くの気づきを得ることができた。

「演芸の世界」を見学して～ミックス型授業の取り組み

全学共通カリキュラム運営センター副部長 経済学部准教授 飯島 寛之

学生の五感を通しての学びを提供しようとする科目は、オンラインだけで授業本来の目的を達成することが難しく、授業形態の模索が続いている。今回見学した「演芸の世界」もそうした科目の一つである。

感染対策をしながら、演芸を肌で感じて理解するためにどうしたらよいか。担当者の細井先生が授業実施案を何度も提出されて対面授業実施の可能性を模索された結果、この科目は対面とオンラインのミックスで行われることになった。「ミックス授業はどのように行われているのか」、「対面とオンラインでどのように授業の見え方が違うのか」——こうした関心を持って私はオンライン授業の様子を見る研究室と実際の教室を往復しつつ、講義とワークショップを見学させていただいた。当日は、紙切りをテーマにする授業であった。

はじめに兼任講師である宮信明先生から、色物、とくに紙切りの研究成果に基づく基本的知識に関する講義が行われた。宮先生を映すカメラやスライドを細井先生が教卓で操作することで配信されるオンラインの授業は、オンライン参加者にも教室に来るのと同じ質を提供しているように思われた。とはいえ、2人の担当者が役割を分担していたために、宮先生の講義がスムーズに行われた側面もある。実際にこれを一人の教員が操作しながら講義するのは、慣れが必要となるだろう。また、TAやSAに求める授業支援についても従来とは違ったものになるため、そのための工夫やTAとの意思疎通が必要になることが想像された。

休憩時間のあとは、紙切りの林家楽一さんによる実演である。流行りの「鬼滅の刃」といったリクエストにも楽一さんが応えて紙を切ると、学生から「オォ」という控えめな声とともに拍手が起こった。

実演が終わると、ワークショップの時間。楽一さんの指示を受け、学生は持参したハサミでいくつもの形を切っていく。オンライン参加の学生も、切った紙をカメラに映して宮先生や楽一さんからコメントをもらっていた。何枚か練習した後、今度は学生が簡易高座に上がっての体験紙切りが始まった。学生が緊張しながら高座に上がり、ほかの学生からのリクエストを聞くと、ちょっとした話をしつつ紙を切ってはそれを披露し、リクエストした学生にプレゼントしていった。オンライン参加の学生にも募集がかけられて、画面越しに切る姿や完成作品を教室の学生や演者がみながら、出来栄えや切っていたときに考えていたことについて意見が交わされた。

フェイスシールドをする楽一さんが紙切りする際の話がマイクで拾えていないなどの技術的な点、カメラが寄っている演者の周りで起きていること・声に置いて行かれてしまう一画面であることの難点、そして“場の空気感”を感じられることに限界がある点はオンライン授業では否めない。したがって、オンラインの参加者は、演者の息づかいや、実際に高座に上がることの緊張感や高揚感を感じることはできにくかったかもしれない。とはいえ、オンライン参加者とやり取りしながら、学生と先生方や演者がそれらの難点を少しでも克服しようと努められていたため、基本的知識の習得はもちろん、ワークショップでも教室に来た学生同様の学びを得ることができたのではないと思う。

コロナ禍でこれまでの学びを提供できない状況ではあるが、いずれの出席形式であっても、学生が当該授業での学びや体験を通じて、演芸における観客の意味を考えることができたのであれば、それは今提供できる学びであるに違いない。



ミックス型授業の様子



林家楽一先生



履修生も実際の紙切りに挑戦



TOPICS 「深く考える力」の育成：言語系科目・必修科目「英語ディベート」（概要編）

外国語教育研究センター 准教授／副センター長 山本 有香

2020年度よりスタートした本学の新英語カリキュラムでは、英語の学びを通して、「深く考える力」を身につけられるように、新たに「英語ディベート」を必修科目として設けました。この授業では、社会問題などを題材に、賛成派と反対派に分かれて英語で討論を行います。1クラスは20人程度で、討論の前後には準備や振り返りの時間も設けています。

英語ディベートを導入した理由の一つとして、学生の持つ英語力の変化があります。これまでのカリキュラムは、高校まで受動的スキル（リーディング、リスニング）を中心として学んできた学生を前提としていました。しかし、新しい学習指導要領では小学校から「聞く」「話す」といったコミュニケーションに慣れ親しみ、中学・高校では英語を使って自分の考えを発信する授業を受けることになります。このような状況の中、大学では、英語の発信力はもちろん、高度な思考力を要する「もう一段進んだ授業」が求められるのです。

■身につけてほしい3つのスキル

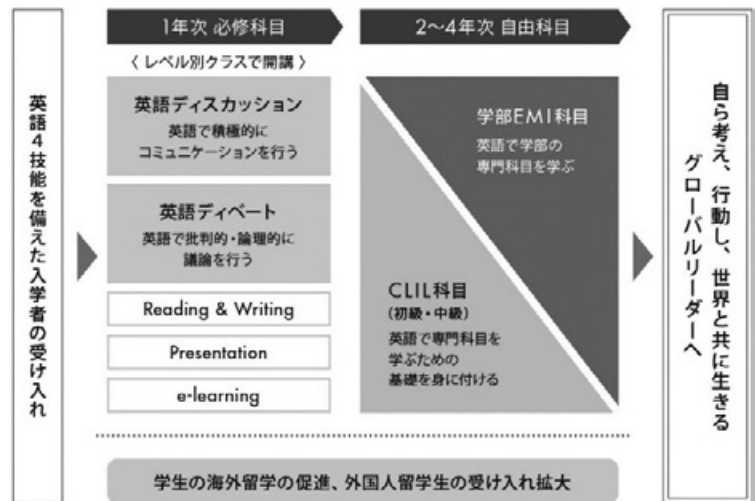


情報を探し出す「情報収集力」が必要です。そして、それをベースに裏付けを持たせて論理的に主張を組み立てる「論理的思考力」が欠かせません。最後に、相手チームの主張を予測し、批判的に分析する「批判的思考力」も大きなカギとなります。これら3つのスキルを身につけるための手段の1つとして、ディベートの授業が位置づけられているのです。

日本国内の大学において、英語によるディベートを全学必修科目としたのは、おそらく立教大学が初めてではないかと思えます。そのため、ディベートを外国語教育向けに教えるための教科書は、日本・海外の出版社を含めて全くと言ってよいほど存在していませんでした。そこで本学では、外国語教育研究センターが独自に開発したディベートの教科書「Up for Debate」を採用しています。全国的に見ても、チャレンジングで、先進的な科目であると言えるでしょう。

ご紹介した3つのスキルは、今後学生がグローバル社会を生き抜く力の1つと考えています。つまり、日々変化化する世界の中で、多様な背景や価値観を持つ他者と協働しながら新たな解決策を見出していくための能力です。長年培われてきた「英語の立教」の伝統を土台としながら、今後も時代の変化に対応し、学生の声に耳を傾け、より良いカリキュラムを提供していきたいと考えています。

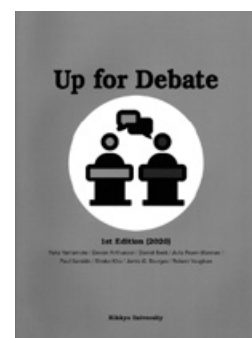
■新英語教育カリキュラムにおける4年間の学びの流れ（立教大学HPより抜粋）



といったコミュニケーションに慣れ親しみ、中学・高校では英語を使って自分の考えを発信する授業を受けることになります。このような状況の中、大学では、英語の発信力はもちろん、高度な思考力を要する「もう一段進んだ授業」が求められるのです。

具体的にはディベートの授業を通して、深く考える力、すなわちクリティカル・シンキングを身につけてもらいたいと考えています。クリティカル・シンキングは、正解がひとつでないものに対して、客観的な根拠を示しながら論理的に答えを導き出す思考力を指します。ディベートを成功させるには、まず、膨大な情報から適切な

■英語ディベートの教科書



【英語ディベートの紹介動画はこちら】 <https://www.rikkyo.ac.jp/admissions/english/debate.html>



TOPICS 「深く考える力」の育成：言語系科目・必修科目「英語ディベート」(実践編)

外国語教育研究センター 特任准教授 喜多 祥子

授業の様子

英語ディベートの授業は、学習、準備、実践の3段階で構成しました。学習段階では、初めに、学生がディベートのイメージを掴めるよう、他の教員と共に撮影したサンプルディベートのビデオを提示しました。学生は、ビデオを見ながら、まず、各チームがどのような根拠を用いて主張を述べていたか、また、相手チームにどのような質問をしていたかを確認しました。その後、どちらのチームがより説得的であったかを話し合いながら、根拠を用いて論理的に主張を述べる方法や、相手の根拠を批判的に分析する方法などの、ディベートに必要なスキルと表現を学びました。次の準備段階では、3～5名のチームに分かれて、選択した論題に対する意見を交換し、チームの主張の根拠となる情報をインターネットでリサーチしながらディベートの準備を完成させました。その後の実践においては、(1)立論、(2)質疑、(3)反駁準備、(4)反駁、(5)要約の順番で、2チームずつディベートを行い、残りのチームは審査員として、それぞれのチームの良い点や改善点を話し合った後、より説得力のあったチームの決定を行いました。ディベート終了後の振り返りの時間には、ディベートの反省点に加えて、チームとしてではなく学生個人としての意見が、ディベートを通してどのように変化したかということについても話し合いました。他の学生の様々な視点を考慮しながら、学生自身の意見をより客観的に分析した上で、自身の意見を変更するのか、それとも、改めて同じ意見を選択するのかという決定を行うことも、批判的思考力の育成に繋がりました。

オンラインでのディベートの授業

今回、オンラインでディベートの授業を行うにあたり、オンラインでのアクティビティの効果についての発見もありました。例えば、ディベートの準備に関しては、各チームのメンバーと教員のみが閲覧・編集可能なディベート準備シートをグーグルドキュメントで共有し、根拠となる情報源のURLや相手チームの主張に関する予測等を書き込んでもらったのですが、メンバー全員が同じシートを同時に閲覧・編集出来たため、準備やディベートを効率的に進めることが出来た様子でした。さらに教員にとっても、コメント機能を使用して助言を加えたり、シートの編集履歴を見ながら、各学生の準備への貢献度を把握するのに役立ちました。

また、実際のディベートにおいても、Zoomのブレイクアウトルームを使用して、ディベートを行っているチームと審査員を一時的に全く別の部屋に分けることが可能だったため、ディベート中のチームは反駁準備に集中でき、審査員はディベート中のチームを気にすることなく、どちらのチームが優勢か議論出来た点が効果的でした。

学生の様子・反応

一学期間のディベートの授業を通して、総合的に、学生の論理的思考力、批判的思考力、質問力の向上が見られました。学期の初めには、学生自身の体験のみを根拠とした主張や反駁が多く見受けられましたが、学期が進むにつれ、相手チームの主張を予測し、ウェブサイトや新聞、法律に関する資料を交えて根拠を挙げながら主張出来るようになりました。また、相手チームの議論に関する質疑応答においても、初めのうちは、繰り返しを求める質問(例：1つ目の理由をもう一度述べてください)をすることに精一杯で時間切れとなってしまうこともありましたが、練習を重ねることで、相手チームの根拠の信憑性や関連性を問い、相手の議論の弱点を提示出来るようになりました。学生アンケートにおいても、「短い時間で反駁に関する話し合いをすることでコミュニケーション力が向上した」、「多くの社会問題について学び、様々な視点の意見を聞くことが出来てよかった」、「他の学生と一緒にディベートを組み立てるのが楽しかった」というような、肯定的な声を聞くことができました。

立教大学 教育活動特別賞受賞者の紹介

第2回立教大学教育活動特別賞（2019年度）を受賞された3人の先生方から、受賞に際しての喜びの声とともに、授業内容・教育実践における様々な工夫や気づきをご寄稿いただきました。

2019年度 総合系科目・多彩な学び「対人関係の心理」 三浦 由美子（兼任講師）

この度は、栄えある教育活動特別賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。このような賞を頂けるとは想像もしておりませんでしたので、驚きと喜びの気持ちでいっぱいです。

授業の内容や工夫について

「対人関係の心理」は、人が人と関わる時に生まれる心理状態を社会心理学の視点から考えるというテーマの講義です。社会心理学の先行研究の知見を基にしていますが、人間の心理や行動は時代・文化によっても変化するものなので、先行研究の結果をそのまま受け入れるのではなく、今の時代や自分達の文化ではどういう結果になるか、と考えてもらうような授業を目指しました。また、複数の先生方が同じテーマの講義を行っていらっしゃる中で、産業領域で働くカウンセラーとしての私の特性を活かした授業にしたいと考え、学生の皆さんが日常感じている対人関係での疑問や悩みと結びつけて講義を構成しました。例えば、面接は第一印象で決まるって本当？なぜ「泣ける」映画を見たくないのか。仲の良い友だちの成功を喜べないのはなぜか。SNSなどのいじめはなぜ起きるのかといったサブテーマを毎回設けました。さらに、オリエンテーションの際のアンケートで加えて欲しいテーマについても意見を聞き、それを反映していきました。

授業の進め方としては、日常生活に活かせるように、知識習得だけでなく演習を通して体感してもらう機会や、双方向のコミュニケーションを取り入れることを目指していますが、300人ほどの大人数のためなかなか実現は難しかったです。それでも2人組でのワークや個人ワークを入れて、自己理解を深められるようにしました。授業中の質問はしづらいと思い、なるべく教室を移動しながら後ろの席の人に声をかける、リアクションペーパーに寄せられた質問は後の授業で読み上げて回答する、良いコメントは全員で紹介するなどの工夫をしました。

学生からのコメントは、私が考えてもみなかった視点が見られるので読むのが楽しみでした。SNS上のいじめはなぜ起きるのか、それを防ぐために自分ができることは何だろうか？という課題については、一人ひとりが出来る事を考え、「このメッセージを読む人の姿を想像してから送信ボタンを押すようにする」「まずは自分がいじめをしないこと、次には傍観者として見て見ぬふりをしない勇気を持つ」などのコメントがあり、感動しました。

授業を終えて

今回の受賞で強く感じるのは、授業は講師一人が作るものではなく、受講してくれた学生との相互作用で生まれるものだということです。全学共通科目の受講者は専攻もさまざま、留学生や社会人の学生の方も多く多様な個性の集まりが生み出す効果は大きかったと思います。法学や物理などを専攻している学生のコメントが人間の心理を突いていることに感心することや、社会人の方の深い洞察に学ぶことも多々ありました。留学生の方々は、言葉の問題や文化の違いもあり、理解が難しかったと思いますが、いつも前列で真剣に授業に取り組む姿に励まされ、毎回とても楽しく授業を行えました。また、学生アシスタントの方にはいつも助けられました。資料の配布や出席の確認などを引き受けてくださったおかげで私は講義に集中することができました。それだけでなく、講義を聴いて感じたこと、面白かったところなどをフィードバックしてくれるのも講義をより良いものにしてくれたと思います。この講義を通して出会えた皆さんに心から感謝を伝えたいです。

2020年度は新型コロナウイルスの流行によりリモート講義になるなど、変化と試練の時でした。環境の変化が人の心理に及ぼす影響は大きいです。人と密に接することが出来ない状況下だからこそ、人と人とのつながりが重要になってくると思います。今回の受賞を励みに、今後も学生のニーズをつかみ、環境に合わせた工夫を取り入れた講義を目指して参ります。

立教大学 教育活動特別賞受賞者の紹介

2019年度 総合系科目・多彩な学び「舞踊論」 糟谷 里美（兼任講師）

このたびは、榮譽ある賞を賜り、心より光榮に存じます。良質な授業運営のためにご支援・ご指導くださった先生方や職員の皆様に、深く感謝申し上げます。そして今回の受賞は、授業を受講する多くの学生たちの懇切な支えによるものであるとも感じております。そこで本稿では、リアクションペーパーや「学生による授業評価アンケート」にみられる学生からのメッセージに注目し、そこからもたらされた教育方法の工夫や改善について述べさせていただきます。

学生からのメッセージで得るもの

以前、1回の授業であれもこれも教えたい、知ってほしいと多くを盛り込みすぎたため、最終的な結論に至ることなく、中途半端な形で授業を終えたことがあります。学生からは、「何がテーマだったかわからなかった」「映像と説明のつながりが不明瞭」といった厳しいコメントがありました。この時のモヤモヤした気持ちを拭うべく、概論的な科目ではあってもテーマを絞り、一つ一つを丁寧に深く掘り下げるようにしたところ、学生からは前向きに受け止められるようになりました。

今年度本格化したオンライン授業では、パワーポイント等を用いて、シンプルで簡潔な資料を提示するよう心掛けています。それによって、各回のテーマと結論がより鮮明に伝わるのが学生からのメッセージでわかってきました。また、オンライン授業では、受け手側の見え方がわからないため、共有画面に関する学生たちの的確な助言が授業運営にとっても役立っています。

このように、学生からのメッセージを反映させた試行錯誤の繰り返しは、授業改善に確実に繋がっているのです。

教えることは教えられること

特にリアクションペーパーを熟読して気づくことは、意識的無意識的にかかわらず、学生たちが教員の言動をかなり細かく感じ取っていることです。授業では、内容に関連した説明以外にも、「個人的意見ですが」と前置きして“つぶやく”（私見を述べる）こともあります。そのちょっとした“つぶやき”に反応する学生が多くいることに驚きを隠せません。つまり学生は、授業内容はもちろんのこと、教員自身の考えや言葉とその発し方など、つまるところ教員の生き方にも注目していることがわかります。

したがって、大学の授業とは、そこに付随するねらいや目標以上に、教員がそれぞれの生き方を示す場でもあると考えられるわけです。現在のような厳しい苦境に立たされる時代においても、自分を見失わずに懸命に前進していく教員の姿、生き方そのものを、学生が授業を通じて感じ取ることで、学生自身が未来をイメージし、試行錯誤しながら成長を遂げていくのではないのでしょうか。そして、それこそが大学教育の奥義であると感じています。

そのことに気づかせてくれたのは、リアクションペーパーの中の学生自身の“リアルな”言葉であり、「教えることは教えられること」であると痛切に感じます。しかも、学生からのメッセージは、それまで学生が受けてきた専門分野や全カリの多様な授業の学びから幾重にも裏付けされた説得力のあるものが多く、その意味でも、授業がリアクションペーパーを通じた学生たちとの対話に支えられていることを感じずにはいられません。

おわりに

全学共通科目総合系科目の「舞踊論」は、様々な舞踊をその根幹にある背景や人々の思い、生き様を通して深く考察することで、物事を多角的に捉える目を涵養することを目標としています。しかし、“舞踊”という特殊な世界に全く興味関心のなかった学生が受講してくるケースも少なくありません。そのような学生たちが、授業の中だけでも“舞踊”に触れ、何かを発見し、今後に活かしていこうと意欲をみせるようになる、その瞬間を目の当たりにできることは、本当に教師冥利に尽きると言えます。今後も多くの舞踊作品やその制作過程の中の人々の生き方や思いを通じて、学生に多様な生き方や自分らしさを発見し探求してもらいたいと思います。そのために、引き続き授業へのご支援とご指導を賜りながら、より良い授業の構築に努めてまいりたいと思います。

立教大学 教育活動特別賞受賞者の紹介

2019年度 総合系科目・多彩な学び「現代社会と観光」 丸山 宗志（兼任講師）

この度は、「立教大学教育活動特別賞」をいただきまして、誠にありがとうございました。この場をお借りして、授業担当の機会をいただいた関係者の皆さまにあらためて感謝を申し上げます。

授業内容

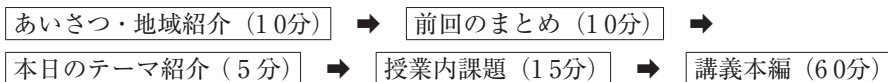
2019年度・春学期に担当しました全学共通科目総合系科目「現代社会と観光」は、現代社会に広く浸透した「観光現象」や、その波を受け入れてきた「地域」に関わる基本的理解を目指す「観光学」の入門講義です。この授業では、観光の基礎を理解するとともに、実際に観光が行われる「地域」の形成過程や産業構造と観光産業との関わりを考えることによって、現代社会における観光の役割や意義について学ぶことを目標としました。授業担当にあたりアクティブラーニングの導入も視野に入れましたが、200名程度の履修者数ではグループワークやディスカッションの統率が難しいと考えたため、座学による講義形式を基調として実施しました。

教育方法の工夫に関する取組み

授業実践において工夫した点は大きく分けて以下の3点です。

①授業の構造（時間の使い方）

本授業では、各回100分の授業時間を複数のセクションに区切ってそれぞれに変化を付け、なるべく授業進行が単調にならないよう配慮しました。各回の構成は扱うテーマに合わせて変動しますが、おおよそのパターンは下記の通りです。授業冒頭のあいさつに続く「地域紹介」はアイスブレイクの役割も兼ねており、担当者が撮影した景観写真によって講義スライドをスタートさせ、「場所」に対する関心を促しながら写真から読み取ることのできる地域の特色について紹介します。また授業内課題は、当日のテーマに関連する検討課題について各自がリアクションペーパーに整理することによって、講義本編の理解に備える狙いがあります。



②映像資料の活用とタイミング

本授業では一貫して、映像資料をとおして観光現象を可視化することを心掛けました。映像資料といえば長きにわたる観光学研究科の院生時代に蓄積してきた録画アーカイブがいくらかでも登板可能な状態でしたが、長時間の映像資料は学生の睡眠を誘導する恐れがあると考え、一部を抜粋して編集したものやYoutube等の短時間のものを使用して、講義スライドによる解説との「切り替え」を意識しました。さらに講義資料の作成時には、映像資料を使用する「タイミング」に注意しました。例えば、講義本編60分をさらに2～3つの小さなセクションに区切り、各セクションに関連する短い映像資料を一定間隔で配置させるなど、講義スライドと映像資料との往復によって内容説明にリズムを作り、受講生が集中力を保つことができるよう工夫しました。



③学期中のアップデート

授業内課題のリアクションペーパーには授業内容に関する質問はもちろん、授業方法についての指摘や要望も自由に受け付けていました。例えば、スライドの切り替え速度や1スライドあたりの文字数など授業進行に改善が必要となれば、可能な限り次回以降に反映させ、授業内容に関わる質問に対しては次回の「前回のまとめ」の時間に解説しました。毎回キャッチボールのような感覚で授業方法のアップデートと質疑応答を繰り返した点は、学生による主体的な受講姿勢や総合的な満足度につながったのではないかと考えています。

大学院を修了したばかりの私にとって、今回の授業担当は学生と一緒に授業を組み立てていく貴重な経験だったように思います。1年次をはじめとした初學者の受講生に向けて「どのように伝えれば観光を学ぶことへの興味・関心を引き出せるのか」を試行錯誤しながら実践することができました。今回の受賞を励みに、今後とも初心を忘れることのないよう教育活動に取り組んでいく所存です。

2020年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

※2021年2月現在。3月に開催されるものについては全て予定です。
 ※*印はオンラインで実施・開催されたものです。

<言語系科目構想・運営チーム>

①英語教育研究室

- ・7月23日(木) 春学期FDセミナー*
- ・1月14日(木)～25日(月)
英語必修カリキュラムWebアンケート実施*
- ・英語力伸長度測定テスト(CASEC / TOEIC IP)*
1年次対象:春学期(プレイスメントテスト)3月30日(月)～4月3日(金)、秋学期 1月12日(火)～1月31日(日)
2～4年次対象:秋学期 10月31日(土)～11月2日(月)、12月5日(土)～12月7日(月)
全学年対象:秋学期 2月1日(月)～2月5日(金)

②ドイツ語教育研究室

- ・7月28日(火) 春学期担当者連絡会*
- ・1月15日(金) 世界を知ろう! 講演会*
- ・2月26日(金) 秋学期担当者連絡会*

③フランス語教育研究室

- ・7月11日(土) 春学期担当者連絡会*
- ・9月28日(月) 世界を知ろう! 講演会*
- ・12月11日(金) 秋学期担当者連絡会*

④スペイン語教育研究室

- ・7月27日(月) 春学期担当者連絡会*
- ・11月5日(木) 世界を知ろう! 講演会*
- ・12月21日(月) 秋学期担当者連絡会*

⑤中国語教育研究室

- ・8月1日(土) 春学期担当者連絡会*
- ・1月30日(土) 秋学期担当者連絡会*
- ・11月14日(土) 世界を知ろう! 講演会*
- ・12月12日(土) 世界を知ろう! 講演会*

⑥朝鮮語教育研究室

- ・7月27日(月) 春学期担当者連絡会*
- ・11月25日(水) 世界を知ろう! 講演会*
- ・1月28日(木) 秋学期担当者連絡会*

<総合系科目構想・運営チーム>

①オンライン講習会

- ・4月22日(水) 第1回オンライン講習会*
- ・4月23日(木) 第2回オンライン講習会*

- ・7月7日(火) 第3回オンライン講習会*
- ・12月21日(月) 第4回オンライン講習会*

②担当者連絡会

- ・7月22日(水)、23日(木) スポーツ実習科目オンライン説明会*
- ・7月29日(水) 2020年度総合系科目担当者連絡会*
- ・2月26日(金) 2021年度第1回総合系科目担当者連絡会*

<授業評価アンケート関連>

- ・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート2019年度報告書」作成(2020年9月発行)

<シンポジウム>

テーマ: オンライン授業の可能性

日時: 2020年11月27日(金) オンライン開催

プログラム:

◆事例報告・コメント:

- 黄 盛彬氏(立教大学社会学部教授)
- 中村 正人氏(立教大学全カリ運営センター兼任講師)
- 芝垣 亮介氏(立教大学外国語教育研究センター准教授/英語教育研究室主任)
- 小川 有美氏(立教大学法学部教授/第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループ座長)

◆司会

- 飯島 寛之(立教大学経済学部准教授/全カリ運営センター副部長)

*本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第26号(2021年3月発行予定)に掲載

全カリニュースレター No.49
 発行 2021.3.3
 発行人 井川 充雄
 編集人 山本 有香、細井 尚子、石渡 貴之
 発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター